地の塩

03. 1.26

最近、小教区の雰囲気の違いがはっきりしてきた感がある。良いのか悪いのかは別にして、以前はどこの教会に行っても同じような雰囲気で、あまり代わり映えはしなかった。地域の雰囲気みたいなものもあり、隣同士の教会は、たいてい同じような雰囲気をもっていた。ところが、最近では、隣接する小教区でもずいぶんと雰囲気が違う。この違いは、司祭によるのではないかと思う▼教会について本音で話すとき、多くの信徒は、司祭の「やり方」で教会の雰囲気が大きく変わると考えていることが分かる。良きにつけ、悪しきにつけ、信徒は司祭に依存している面が多い。司祭の「やり方」について、意見があっても、それを言うことは、司祭を批判することであって、信徒はそれを言ってはならないと考える。そして、司祭もまたそのように考えていることが多い。さらには、それを求めることさえある。黙って司祭に従うことが美徳とされているが、果たしてそうだろうか。実際、人は「黙っている」ことは難しいので、結局は陰で話し合われることになる。かくして、信頼関係が揺らいでくる▼司祭は確かに共同体を全体的な立場から見て、宣教司牧をしようとしているが、当然、信徒の立場からしか見えないこともある。教えてもらわなければ、分からないことがある。指摘されないと気付かないこともある。信徒と司祭が互いにもっと「聴く耳」を持つことができれば、共同体はもっと生き生きしたものになるのではないか▼司祭も信徒も同じみことばと食卓からキリストを頂いている。上下関係、または権威の関係だけでなく、同じ方から「食べさせていただいている」という関係に目を留めるなら、教会は主によって、もっと変えられると思う。

（Y）